

## 足跡カード



イラスト・岡林玲生

自動券売機の前には人が列をつくるのを見かけなくなった。

そのことに初めて気付いたのは、今年の三月、新宿でだった。土曜、夜九時をまわり、少し前ならごった返していたはずの券売機前に、列らしい列がほとんどない。チャージ式のICカードが導入されて久しく、もう券売機で切符を買う人は少ない。私も当然PASMOを持っていて、長距離の旅以外で切符を持ったのはいつだったか、思い出せないくらいだ。便利になったなあ、と思う。券売機が使われる頻度自体が減ったので、チャージをする時に待つようなことも少ないし、非接触型のほうが改札を通る時にもスマートだ。

こうなると、切符を買っていた頃が懐

かしい……というほうへ話が向くのが普通かもしれないが、個人的に、切符以上に懐かしくなってしまうのが、バスネットである。

上京が決まり、私のアパートを探しに両親と三人で田舎から東京へ出てきた時、父はバスネットを三枚買って私と母にも持たせた。このアパート探しは非常に難航したので（小平まで行って予約金を払ったアパートを内見したら、飲み屋街の裏でしかも騒々しい学生たちの巣窟だった）、いちいち切符を買わずに済むバスネットはすごく役立つてくれた。

だから私は東京で暮らし始めてすぐ、バスネットを購入した。結局歩いて大学に通える場所に家を借りたので、定期というものは持たず、出かける時はいつも

バスネットだった。

改札を通ると、裏面に日付と駅名が印字される。駅名をコレクションしているみたいで面白くて、最初の頃は使い終えたカードを保存していた。少し後で見、「あれ、こんなところに何しに行ったんだろう」と思うのが楽しい。永田町は国会図書館。仙川は友だちの家。新木場は植物園。

日付と駅名を履歴として表示することくらい、今も可能なかもしれないけれど、あれが、ばらばらの絵柄のカードに印字されているのがまたよかったのだ。鉄道会社によってカードの柄が違う上、限定版があるとそちらをつい買ってしまふ。逆に、かわいくない、こんなのだ、と思っても急いでいるとかの理由で買っ

たカードも印象に残った。

上京後から、二十枚くらいは使用済みカードを溜めていたと思う。でもある時ふっと、これをいつまでも持っていたって邪魔だし資源の無駄だな、と思って一気に回収箱に入れてしまった。それから使わずに回収箱行きにしたので、カードは一枚も残っていない。

このエッセイを書くために調べて知ったのだけれど、バスネットが使われていたのは二〇〇〇年秋から二〇〇八年春、私が東京で暮らした時期とおおまかにかぶるのだった。一枚くらい、東京の思い出として残しておけばよかったと思う。私はもう東京に居らず、網の目のような線路を乗り換えて冒険することもあまりない。



文・豊島ミホ  
Miho TOSHIMA

1982年、秋田県生まれ。早稲田大学第二文学部卒業。大学在学中に『青空チェリー』でデビュー。著作に『檸檬のころ』『カウントダウンベルズ』『初恋素描帖』など。現在は神奈川県に在住。